

鹿児島の植物60

霧島の植物

植物担当 久保紘史郎

霧島に春の訪れを伝えるのはマンサク。大浪池周辺には特に多く、3月下旬から4月上旬には、木々は黄色い花で彩られます。マンサクの名前の由来は春に「先ず咲く」からと言われており、マンサクが咲き終える頃には多くの花たちが冬の眠りから目覚め始めます。



マンサク

足下に目を移すとスミレ類も見られます。白い小さな花がかわいらしいヒメミヤマスミレは登山道や林床に多く見られます。またニンジンのような葉が特徴のヒゴスミレや花びらが桜



ヒメミヤマスミレ

に似たサクラスミレなど県内では珍しいスミレ類が見られる場所もあります。



ヒゴスミレ

5月上旬の連休頃にはえびの

高原のノカイドウが満開となり、多くの観光客で賑わいます。国の天然記念物に指定されているノカイドウはつぼみの頃は赤色、咲き始めは赤と白が入り交じったピンク、満開の頃には白色と



ノカイドウ

だんだんとその色彩を変えていきます。満開も綺麗ですが、時期をずらして違っ

た表情を楽しむのもお勧めですよ。

鹿児島の動物41

アカハライモリ

動物担当 池 俊人

イモリとヤモリは名前も体形も似ているので、区別できない人も



アカハライモリ成体（オス）

多いのではないのでしょうか。イモリはカエルと同じ両生類なので、幼生は水中で生活します。ヤモリはトカゲやヘビと同じ爬虫類なので、一生陸上で生活します。

県本土にいるアカハライモリは、ほぼ全身が黒色ですが、お腹は鮮やかな赤色でとても目立つのも特徴の一つです。実は皮膚に毒をもっているため、毒々しい色を目立たせることで、天敵から食べられにくくしているのです。このように、他の生物に危険を知らせる派手な体色のことを警告色といいます。

現在、県立博物館ではアカハライモリを飼育展示していますが、今年1月頃から水草に卵を産み始めました。卵からふ化した幼生は首の左右両側に「えら」が出ていて、水中で呼吸できるようになっています。ミジンコなどを食べて成長し、夏頃にはえらがなくなって肺で呼吸するようになり、上陸して陸上生活を始めます。もう少しの間だけ見ることができるアカハライモリの幼生を、博物館に見に来てみませんか。



幼生（上から見たところ）